



実施者

＜実施者＞

産学協働地域活力創造事業 地域コーディネーター 青木 秀幸（千葉工業大学非常勤講師，合同会社いもんだ）

- a. 合宿ボランティア：千葉工業大学 工学部 情報通信システム工学科／創造工学部 都市環境工学科／先進工学部 生命科学科／情報科学部 情報工学科／社会システム科学部 PM 学科から 計 5 学部 5 学科計 12 名
- b. プロボノ：千葉工業大学放送研究会5名、社会システム科学部 PM 学科 加藤研究室教員1名学生2名 計7名

＜協働パートナー＞

【行政】南房総市 市民生活部 市民課（市民協働G，富山・丸山・三芳・和田地域センター），観光プロモーション課，商工課，企画財政課，教育委員会，南房総中学校

【企業等】みねおかいきいき館 ＊実施サポート 千葉工業大学新習志野学生担当

【市民団体等】地域づくり協議会（ふらっと（富山），みよし（三芳），郷づくりまるやま（丸山），きらり（白浜），きずな（千倉），チーム花鯨，丸山農業まつり実行委員会，フラワーマーチ実行委員会，高家神社，大井自主防災組織 かわせみ，各行政区ほか

1. 背景・目的

本プロジェクト(以下 PJ と略す)は，少子高齢化の進む南房総市と，実践教育として地域活動に取り組む大学が連携し，平時の地域活動や災害時の復興等の担い手不足解消を目指すものである。2020 年から継続する取り組みであり 5 年目となる。

本年度は，改めてボランティアを通じて築かれる地域と学生とのつながりを“地域にとっての資源（関係資源）”ととらえ，令和元年房総半島台風の教訓からも，それらは災害時等の復興の多様な担い手確保の面で有用なものになるであろうと考えた。そこで本 PJ では，自治体がひごろからその関係資源を“つぎ足し”ながら蓄え，平時の担い手不足を補い，“非常時に備え”て災害時にはそれを活かそうとする一連の取り組みを，「サポーターローリングストック＊」と独自に定義づけた（図1）。

そのうえで本年度は，サポーターローリングストックの実装を前提に，以下の3つを目的として取り組みをすすめた。

- ①平時の地域活動応援：「市民活動」「地域産業」「防災教育」など，担い手不足が顕著な分野において，ボランティアやプロボノを通じて現地団体の活動継続や新事業展開を支援。
- ②非常時に備えた人材育成：現地での実践を通じて，地域の担い手の役割や機能を補完できる大学関係人口を育成。
- ③持続可能な仕組みづくり：大学のボランティア制度を活用し，課題整理や改善策を検討。

2. 活動内容

（1）平時の地域活動応援

第2期の南房総市総合戦略 2020- において，本枠組みにおける現地の地域活動応援は，コロナ禍やコロナ禍明けの市民活動団体や事業者，行政各課からの非営利活動における人手不足等のニーズや抱える課題の緊急性に基づき，「合宿・週末ボランティア」と「専門性を活かしたプロボノ（学生の特技や専門性を活かしたボランティア）」を行ってきた（図2）。これをみると市内の各地域活動や事業活動の担い手不足は多岐に渡り，拡がってきている実態が判る。

本年度は昨年の「コロナ禍明けの市民活動の再始動」に関する関係者への聞き取り調査より明らかになった「メンバーの高齢化や活動離脱による活動再始動にあたってのマンパワー不足」などの課題に対して，引き続き学生チームによる現地活動応援を行った（表1）。

a. 合宿・週末ボランティア【全学部共通／選択必須教養科目対応】
現地での当ボランティア活動は，千葉工大の「社会貢献の意義を理解し，実社会が求める人間力を涵養することを目的とした「ボランティア科目単位履修制度」と連携した取り組みで，現地活動 30h/ 人を，長期休暇（夏期・春季）や週末休暇を利用して，市内に滞在しながら，2～4 学科所属の横断的なメンバー 5 人程度からなるチームで行う活動である。限られた期間内で，集中して現地側のニーズを達成するのがミッションとなる。

b. 『プロボノ』スチューデント[サカ等学外地域貢献活動(単位認定なし)]
専門的な知識や経験を活かしてボランティアで地域貢献をするプロボノを実施した（表2）。この取り組みについては，大学の単位取得等に関係なく，地域ニーズに対応できる有志メンバーで取り組まれた。ここでは期間も定めず，あくまでもニーズに答える成果を達成することがミッションとなる。



図2 平時における様々な地域の担い手に対する活動応援（2020-2024 年度）

表1 地域の担い手に対する合宿ボランティア応援（2024）

分類	実施期間	活動内容	実施地域	学生ボランティア
ボランティア（現地）	8/3～8/5（3日間）	SDG's チャレンジ 夏ボラ！小学生自然体験学習支援ボランティア in 南房総市（小学生向け夏休み特別企画 磯遊び 体験支援、南房総市里山体験拠点の周辺整備と生態観察、体験メニュー企画づくり、丸山川水辺の生きもの観察会ほか）	白浜/富山	3名
	1/17～19（3日間）	SDG's チャレンジ冬ボラ！食と農にまつわるイベントサポート in 南房総市（丸山農業まつり※設置運営・運営補助/峰岡牧の遊歩道整備ほか）	千倉/丸山	4名
	2/14～16（3日間）	SDG's チャレンジ春ボラ！ウォーキングイベントサポート in 南房総市（南房総フラワーマーチ※ 会場設置撤収、運営補助ほか）	白浜/千倉/和田/丸山	5名
	計9日間	現地活動30h/人×12名＝total360h、9団体の応援活動	全5地域	12名

表2 地域の担い手に対するプロボノ応援（2024）

分類	実施期間	活動内容	実施地域	学生ボランティア
プロボノ（現地・遠隔）	10月～3月（6ヶ月）	●「第11回 まほろば夢家まつり」の映像撮影【現地】 日時：10/26(土)8:00～18:00 場所：南房総市役所三芳分庁舎 内容：設営から本番までのタイムラプス撮影/演舞の撮影/関係者へのインタビュー撮影ほか ※事前ZOOM-MTあり ●映像作品の制作【遠隔】 内容：「まつり編」と「インタビュー編」の2部構成の作品制作にむけた編集/定例会議(月1回)/パネ会議(随時)ほか	三芳 習志野 津田沼	放送研究会 5名
	12/8（1日間）	●千倉中学校の南房総学「竹あかり大作戦」の運営支援【現地】 日時：10：00～12：00、場所：南房総中学校技術室 対象：中学3年生72名、 内容：竹あかりづくりの体験促進/電動ドリルの使い方指導と安全管理/ 会場準備と撤収 ●中学生が制作した「ミニ竹あかり」の設置【現地】 日時：13：30～16：00、場所：高家神社の参道 内容：LED用の穴あけ加工、参道への設置作業ほか	千倉	PM 学科2名 +教員

図1 サポーターローリングストック【自治体版】の概念図

域学協働の工夫！

- ★ボランティアを通じて地域と学生とのつながりを築ききっかけづくりのために，学生を「学内から地域へ押し出すしくみ」としての大学のボランティア制度を積極的に活用。
- ★学生にはボランティア以降地域への「関わりしろ」を見つけるうえでのヒントを地域側より提供してもらい，地域や団体・人との関係性の階段を上っていくうえでの具体的な方法（貢献形態，学内カリキュラム）も紹介

（2）非常時に備えた人材育成での3つの工夫

地域と大学関係人口が関係性の階段をのぼり，「平時をささえ非常時の備え」として期待できるまでになる（ファンからサポーターになる）ためには，現地でボランティア活動をするだけではこと足りず，学生らが地域や市民活動への想い（関心）を高め，かつ自ら地域コミュニティや市民団体，行政との結びつき（関与）を高める，もしくはできると思うきっかけづくりが重要となる。そこで本年度のプログラムでは，以下の点を意識しながら実施した。

- a. 地域の魅力にも触れてもらいまずは南房総のファンになってもらう工夫**
まずは想いを深めてもらう工夫で，期間中学生ボランティアにできるだけ南房総の自然やひとなどの魅力に触れてもらい南房総のファンになってもらうことを意識した機会づくりに取り組む。次に，活動に先立ち，南房総市での地域活動（暮らし）や農業（生業）の実状を知ってもらい，地域のヒトへの共感を促すような機会を設け，そして活動では，その後の地域や市民活動への「想い」の強さを左右する「褒められる」「役に立つ」実感を，プロボノではそれらに加えて「期待される」「必要とされる」実感を得られるような場づくりを心掛けた。
- b. 他 PJ の成果見学等を通じた地域への“関わりしろ”の事例紹介**
次は関わりの幅を広げてもらう工夫で，学生等が地域コミュニティや各種団体との結びつきを高めようとするには，自分も役に立てる

と思える市民活動等における「関わりしろ」のあることが重要である。そのため本取り組みでは，そのイメージを持ってもらうために，期間中帯同する市職員やコーディネーターより，ボランティア以降の工大生なりの地域への「関わりしろ」を見つけるうえでのヒントを提供するよう心掛けた。具体的には地域や団体・人との関係を続けるうえでの具体的な方法（貢献形態，学内カリキュラム）を紹介し，現存する先輩たちの残した成果の実物をできるだけみてもらうようにした。

c. 学生むけ防災教育と社会人基礎力（特にチームで働く力）の養成
本ボランティア企画においては，可能な限り「防災」についての学習や体験ができるような場づくりも心掛けた。例えば本年度は，表1中，夏ボラ，冬ボラ，春ボラの期間中において，「行政機関の実施する備蓄品試食体験」の取り組みや，「イベントでの防災啓蒙活動」，「自主防災組織の平時取り組みや非常時での取り組み」を学び，体験できるような機会をプログラムに盛り込んでいる（写真1,2）。また平時や災害時における現場での市民活動は，いずれもチームでの活動が基本となり，多様なメンバーや協働パートナーとともに目標にむけて協力する力（チームで働く力）が重要となる。本ボランティアプログラムでは，社会人基礎力養成の一環として「チームで働く力（社会基礎力の1つの柱）」の養成に力を入れた。実施にあたっては，市内のボランティア活動は原則複数の学科に所属する学

* もともと「ローリングストック」とは，普段の食品を少し多めに買い置きしておき，賞味期限を考えて古いものから消費し，消費した分を買い足すことで，常に一定量の食品が家庭で備蓄されている状態を保つための方法を意味する。ここでは，食品を「サポーター人材とのつながり（関係）」に，消費を「活用する」とおきかえた災害への備えの取り組みを差す。造語。



写真1～3 学生むけ防災教育とチームで働く力の養成を兼ねた体験

写真4 千葉工大生のアイデアをもとに実用化された公共施設の予約・鍵貸出システムの解説

表3 AISAS理論にもとづく学生ボランティアの行動モデルと単位認定制度（ボランティア制度）の効果的運用にむけた学生提案

	潜在層 強化の必要性（課題） 顕在層				
	認 知 Attention	関 心 Interest	検 索 Search	行 動 Action	共 有 Share
【学 生】 本PJが目指す 状態の変化	知らない →知っている	知っている →気になる	気になる →検索する	問い合わせない、 応募しない →問い合わせ易い →応募している	感想をシェアして いない →感想等をシェアしている
【学生⇄南房総市】 コミュニケーション目標	できるだけ多くの 見込み学生（科目履修者、全体が「防災」受講者）に情報が伝わるように発信する	学習支援システムの掲示板等で「南房総市での学生が「防災」の「イメージ」を分かりやすく伝える	工大生の検索エンジンによる検索結果においても、上位表示されるような対策をうつ	スムーズに応募、書類のやり取り等ができるように誘導する（応募～計画書提出までのリードタイムを短くする）	南房総市での体験に対する満足度や感想を共有したくなる工夫を行う
【本 P J】 学生からの評価と提案（R6）	・友達の口コミ◎（ただし希少） ・manaba掲示板における募集情報の時系列表示▲ ⇒アナログな学内広報（ちらし、説明会）の実施 ⇒メールやSNSメッセージでの直接通知ほか（事前登録後）	・学内では体験談を紹介する情報なし▲ ⇒体験談を紹介した動画の公開、リフレット作成配布 ⇒独自のHP・SNSを設置、リフレットにて誘導ほか	・学び＋旅のキャッチコピー◎ ・現状の募集書類による体験、現地の「イメージ」固着▲ ⇒専用のHP・SNS上において実施内容と併せて地域の魅力、宿情報等の詳細情報の提示ほか	・全30hのプログラム◎ ・署名問題▲ ⇒電子署名、応募フォームの導入 ⇒手続きフロー図 ⇒参加特典の工夫（「グループ」応募、修了証明書発行等） ⇒宿泊費補助（PPA提携先拡大）	・体験談を紹介できる媒体なし▲ ⇒リフレット、ドキュメントリークがな映像作品等での体験談⇒SNS共有、口コミ紹介と体験投稿への特典づけ ⇒リフレット交流イベント（OBOGと在学生）



表4 非常時に備えた人材育成事業として本モデルを導入した際のメリット・デメリット

サポーターローリングストック		（一般的な） 防災ボランティア養成講座等
若者世代中心◎ （地域外の在学中の学生。場面によっては教職員も）	参加者	高齢世代中心（地域内居住者を対象とする場合が多い）
防災の専門性は低い△、コミュニケーション力（子ども～高齢者まで多世代間）◎	備わる知識・技能	防災の専門性は高い◎
通常ボランティアで応援◎ ビジターとしての経済的貢献◎	平時の地域貢献	少ない△

11回目で最後となる（可能性のある）象徴的な地域行事を映像として後世に残すことに貢献できた。

(2) 教育・研究面

- ・合宿ボランティアとプロボノでは、合わせて5学部9学科の学生が参加できた間口の広い取組みとなった。また合宿ボランティアでは、平均すると2～4学科の学生がチームを組み、実践活動に取り組む場づくりができ、参加学生（特にサークルに所属しない参加学生）からは、「他学科の授業の話しが聞けて貴重な機会となった」など学科を横断する実習の場としての満足度が高かった。
- ・大学に寄せられるボランティア募集が不足するなか、これまで毎年コンスタントに20人前後の中規模レベルの受け皿としての役割を果たしたことも、教育貢献につながる成果となった。
- ・大学の「ボランティア科目履修制度」と絡めたボランティアプログラムの運用では、学生の「関心」と「共有」をうながす地域から工大生にむけた情報発信が学内学習支援システムmanabaを通じた発信だけでは足りないといった課題が明らかになった。改善策としては、体験談を動画や記事としてまとめ、独自のHP・SNS、リーフレットなどで紹介する、リアルOBOG交流イベントを実施するなどの学生目線で提案された対策が考えられた。

4. 総括

本PJでは、少子高齢化が急速に進む南房総市と、ボランティア活動など実践教育の場を地域に求める大学が連携し、平時の地域活動や災害時における復興活動の担い手不足解消と多様化を目指すものである。主な取り組みとして、コロナ禍の影響もあり地域の担い手不足から生じる問題が地域の中で顕在化するようになり、その内容は市民団体等の活動継続や再始動のための応援が主なものになっていった。そしてその傍らで令和元年房総半島台風被害からの復興にあたっての教訓より、非常時に備えたひごろからの地域

*表彰・マスコミ掲載など

- ・令和6年度市町村と市民活動団体との連携促進事業に係るアドバイザー派遣活用事業（千葉県）、大網白里市市民生活部市民協働課主催、大網白里まちづくりコーディネーター養成講座「未来洞察！今こそみつめ直す地元ならではの協働の可能性」、2024.9.25 ※協働の再構築に関する講演とリジナル教材を使ったワークショップにてファシリテーションを担当。
- ・房日新聞、「地元の海岸の魅力体験 ～白浜小の児童11人宝探しとスイカ割りで～」,2024.8.15

生チームで活動することや活動の前後途中では昨年度開発した「社会人基礎力診断・成長シート」を活用してメタ認知を促す機会を設けることなど点を工夫しながら行った（写真3）。

(3) 持続可能な仕組みづくり

大学生が社会貢献の意義を理解し、実社会が求める人間力を涵養するために積極的に地域活動を行うためには、「学内から学生を地域へ押し出すしくみ」（ex 単位認定ほかの動機づけ等）と「地域側から引き出すしくみ」（ex 定期的なボランティア募集や活躍の場づくり等）の双方が重要と考える。本PJでは各側面についてこれまで次のような取り組みを行った。

a. 「学内から学生を地域へ押し出す」しくみづくり

=2020～2023の経緯＝

- ①「ボランティア科目単位履修制度」の理解、学生参加状況（コロナ禍と明けの違い）、地域側からの募集状況の変化などについて学内の科目担当係の担当者2名へのヒヤリング（2023）
- ②南房総ボランティアへの全参加者へ、「募集情報の収集法」や「応募までの手続」などについての行動と学内単位認定制度の満足度について聞き取り調査を実施。AISAS理論*にもとづく学生の行動モデルと制度の効果的運用にむけた課題を抽出（2023）

本年度は、引き続き②について、参加学生への聞き取り調査を継続するとともに、地域側からの単位認定制度の効果的運用にむけた現状の改善案について学生より提案を受けた（表3）。

b. 学生を「地域側から引き出す」しくみづくり

=2020～2023の経緯＝

- ①科学者やエンジニアの卵である理系学生に対して、持続可能な開発目標（SDGs）への意識を、身近な農山漁村における実践活動を通じて高めてもらうボランティア等企画の提供（2020-2023）
- ②新型コロナウイルス感染症対策を徹底した現地ボランティアとオンラインでの遠隔ボランティアの実施環境づくり（2020）

③ボランティア経験者の「また機会があれば南房総市の地域の役に立ちたい」ニーズを汲み取るプロボノ実施機会の提供（2020）

④既存の地域防災の担い手を補う新たな防災の担い手としての大学関係人口のニーズ調査（2021-2023）

⑤一般的な「ボランティアマッチングサイト」の調査と本PJとの連携可能性の検討（2022）

⑥ボランティアと地域との関係性をつなぐ役割（地域の関係案内所としての役割）が期待される「地域づくり協議会（全地区）」との連携・協働体制を強化（2023-2024）

本年度は、引き続き①⑥に取り組むとともに課題を整理し、改善方をリストアップした。

c. 非常時に備えて「関係性を継続する」人材データベースづくり

本PJでは、地域と学生とのつながりを“地域にとっての資源”としてとらえ、本年度より災害時の備えとして、2021年よりこれまで災害時等非常時における地域側からの応援協力の呼びかけを許諾してくれたボランティアOB・OGたちのデータベースづくりの試みをはじめた。通知受信の可否は、プログラムの終了時に実施するふりかえりアンケートを通じて地域側から確認をする手続をとった。登録対象期間は、学生の心理的負担を考慮し在学中とした。

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

- ・本年度の合宿・週末ボランティアでは、1年を通じて旧町村5地区で、12日間、360時間（成人一人分の活動で積算）、コロナ禍が明け市民活動を再始動した9団体による地域イベント、こども自然体験、遊歩道整備等の応援ができた（写真5～9）。団体からは概ね満足してもらった。中でもこどもの体験促進の支援活動では、学生ならではの役割やその効果について好評で、幾つかの団体からは早速次年度の協力要請を受けている。
- ・プロボノ活動の「まほろば夢楽まつり」の映像作品づくりでは、

* AISASとは、2004年に民間企業が提唱したマーケティング理論の1つで、消費者が商品やサービスの選定・利用に至る行動について、ある一定のパターンとして整理したモデルで体系化されたもの。AISASはそれぞれ「Attention（注意）」、「Interest（関心）」、「Search（検索）」、「Action（行動）」、「Share（共有）」の5つの頭文字を取っており、インターネットやスマホ等の端末が充実して消費者が能動的な検索（Search）と共有（Share）をおこなうようになったことを考慮したところが特徴となる。